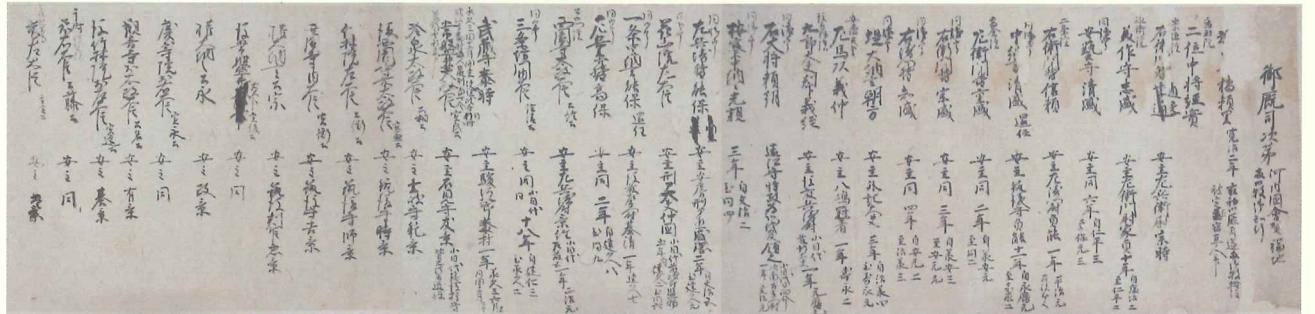


II 中・近世史料にみる馬

馬は、農耕・輸送・移動・戦場での乗物など、古くより人々にとってかかせない身近な存在であったことから、当館収蔵史料の中にも馬にかかわるものが多くみられる。ここでは、中世史料として公家の西園寺家文書と、近世史料として大名の阿部家文書のなかから馬に関する史料を紹介する。

御厩司次第
室町時代（16世紀）



本書は、戦国時代に書かれたもので、平安時代後期（11世紀末）から室町時代後期（16世紀中頃）までのおよそ500年にわたる、院（=上皇。譲位後の天皇の呼称）の厩を管理統括した役所（御厩）の長官（御厩司）と実務担当者である案主（安主）歴代の名簿である。訂正や単純な誤りもあるため、清書したものではなく草稿だと思われる。

承久の乱（1221年）以前、つまり鎌倉幕府が安定するまでの時期については、上段に御厩司の名前と、その右肩に時の院の名前が、下段の案主の欄には、御厩司および案主の任期と就退任の年が記されている。

貴族の生活が潤っていたころには、院のもとには全国から多くの馬がもたらされ、その馬たちは京都周辺の放牧地（牧）で飼育されていた。それらを管理した院の御厩司には、院の信頼を受け、軍事的に奉仕する人物が任じられることが多く、平忠盛・清盛・重盛などの平氏一門や、源頼朝と弟の義経、御成敗式目を作ったことで有名な北条泰時など武士の名前が見えていく。また、案主には御厩司の右腕と呼べるような人物が就任していることもわかる。

承久の乱を経て、鎌倉幕府の力が安定すると、貴族の中では幕府や天皇家とも緊密な関係を持った西園寺家が権勢を得て、御厩司にも公経・実氏・実兼以下の西園寺家歴代の当主が就任するようになった。しかし、室町時代に入ると、貴族の地位も財力もますます低下



春日權現靈験記（模本）、前田氏実・永田幾麻
Image: TNM Image Archives

西園寺公友氏寄託

し、荘園などの支配が維持できなくなっていた。西園寺家もまた例外ではなかったが、戦国時代に至るまで、少なくとも院御厩司に付属する所領であった河内国会賀・福地（大阪府藤井寺市ほか）の両牧からの収益を得ていたことは、この史料からうかがえる。

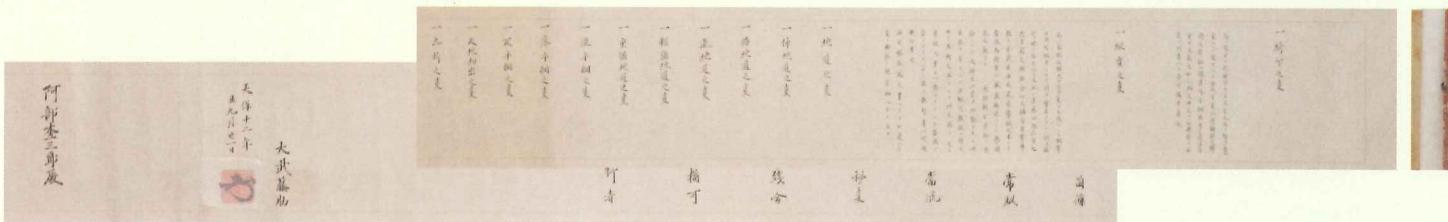
（客員研究員 徳仁親王・木村真美子）

西園寺家文書

西園寺家は、藤原氏北家閑院流の堂上家で、家格は摂関に次ぐ清華。平安後期の通季を始祖とし、鎌倉初期の公経の代に西園寺と号した。維新後は、華族制度のもとで侯爵、のち公爵にのぼった。同家に伝來した史料は、宮内庁書陵部・立命館大学など諸所に伝わるが、当館にも、平成8年（1996）に西園寺公友氏から寄託された600点余が収蔵されている。

おおつぼほんりゆうじょうぎょむちたづなもくろく
大坪本流常馴策手綱目録 阿部塗三郎（正定）宛 天保12年（1841）丑9月21日

阿部正靖氏寄託



大名家など武士の家には、馬術を含む剣術・弓術・槍術などの武術に関する秘伝書や免許状が残っていることが少くない。それだけ武芸が重んじられたことのあらわれといえよう。平安時代後期以降、武士が台頭してからは、合戦で馬が重要な役割を果たすようになり、乗馬技術や良馬の飼育の向上が見られた。鎌倉・室町・戦国時代を経て、江戸という戦のない平和な時代を迎ても、武士のたしなみとして馬術が盛んに行われたことが、阿部家に伝來した馬術の免許状によって窺える。

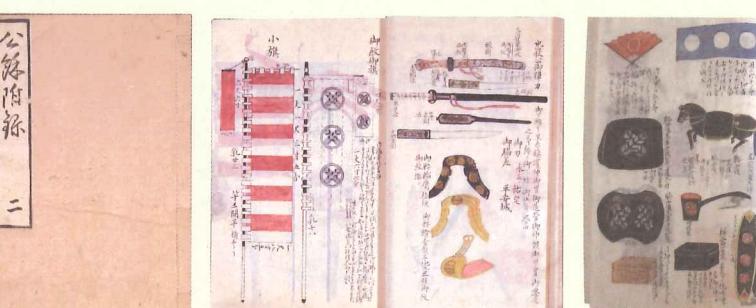
本史料は、陸奥国白河藩主14代当主阿部正定*に授与された、馬術の流派の一つである大坪本流の免許状

である。基本的な乗馬法・調教法63箇条と手綱・鞭の操作法が伝授されている。大坪本流は、一説に足利義満・義持に仕えたと言われる大坪慶秀によって創始された大坪流（小笠原流、八条流、内藤流共に古流）から別れた流派。大坪本流は、江戸時代中期に「五馴の法」を考案した福岡藩土崎藤定易（1695～1744）によって開かれた。「五馴の法」とは、①乗馴②相馴③礼馴④軍馴⑤医馴である。

*正定は、阿部家の分家である旗本阿部正蔵の長男として生まれ、嘉永元年（1848）正備の養子として白河藩を継いだが、同年に25歳で死去した。この免許状は、藩主になる以前の17歳の時にもらっていたものである。

こうよふろく
公餘附録 江戸～明治時代（19世紀）

阿部正靖氏寄託



「公餘附録」は、譜代大名阿部家の歴史について歴代当主ごとにまとめられた編年史である「公餘録」（全8巻）の附編で、12巻からなる。内容は、系図、絵図などさまざまな参考資料が載せられており、その中に馬に関する記述もみえる。家臣川澄次是によって慶応2年（1866）以降に編纂された。

（学芸員 丸山美季）

阿部家と馬

阿部家に伝わる有名な逸話がある。大洪水が江戸を襲った時に、三代将軍家光が、隅田川の濁流を馬で渡って救う者はないかと家臣に命じたが、誰も申し出る者がいなかった。その中で、二代藩主阿部忠秋が一人進み出て、今にも氾濫しそうな隅田川に馬を乗り入れて対岸へ無事に渡りきり、家光により賞賛されたというエピソードである。馬との関係の深い家柄であったといえる。

阿部家文書

阿部家は、譜代大名で、老中など幕府の要職を務めた人物を輩出した家柄である。武蔵国忍（埼玉県行田市）、のち陸奥国白河（福島県白河市）、次いで同国棚倉（福島県東白川郡棚倉町）で10万石を領した。家格は雁間詰・城主。維新後は子爵となった。古文書のほかに近代華族史料、古写真や長持など、総点数4700点余からなる。

